323

年ノ宮（としのみや）遺跡

（伊佐郡菱刈町大字南浦小字年ノ宮）

第１図　年ノ宮遺跡の位置

位置と環境

寺山・年ノ宮遺跡は，菱刈町役場の南西約2.5㎞にあり，菱刈町を二分する川内川右岸で，本城地区南側の台地上，標高198ｍに位置している。

調査の経緯

発掘調査は，県営圃場整備事業（南浦地区）に伴い，菱刈町教育委員会が調査主体者となり県教育委員会の協力を得て，平成２年（1990年）５月７日～５月28日に実施した。遺構が検出された範囲については，盛り土工法によって保存措置を講じた。

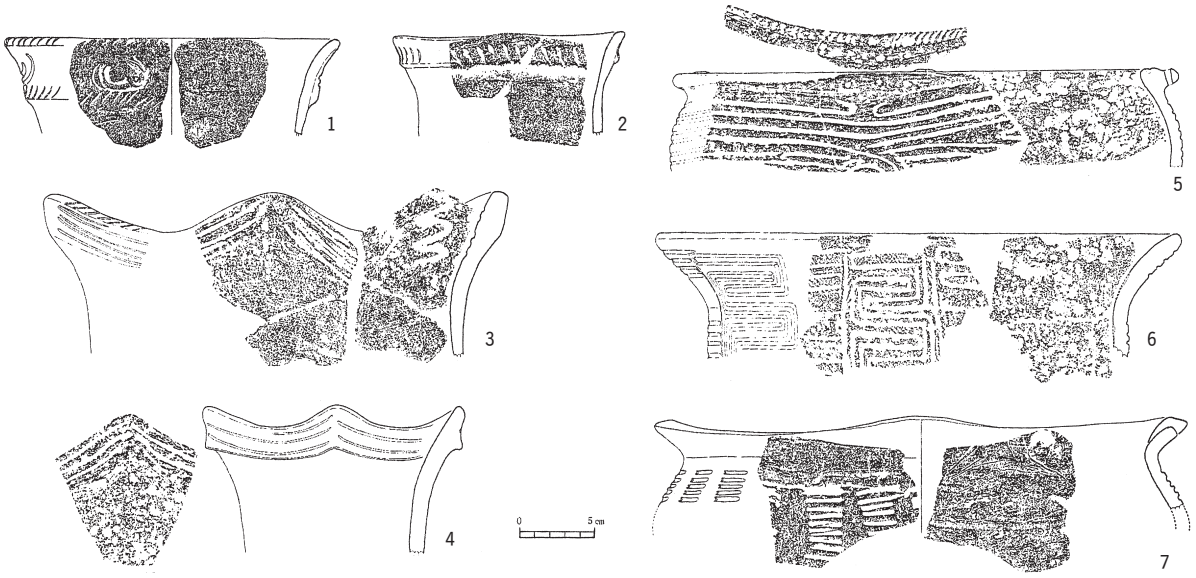
遺構と遺物

年ノ宮遺跡は，発掘調査の結果，縄文時代前期～後期，古墳時代，歴史時代の遺物・遺構が発見され，比較的長い期間の生活が営まれたことが判明した。その中で，主に縄文後期の包含層と歴史時代の中世の遺構がまとまった形で検出されている。

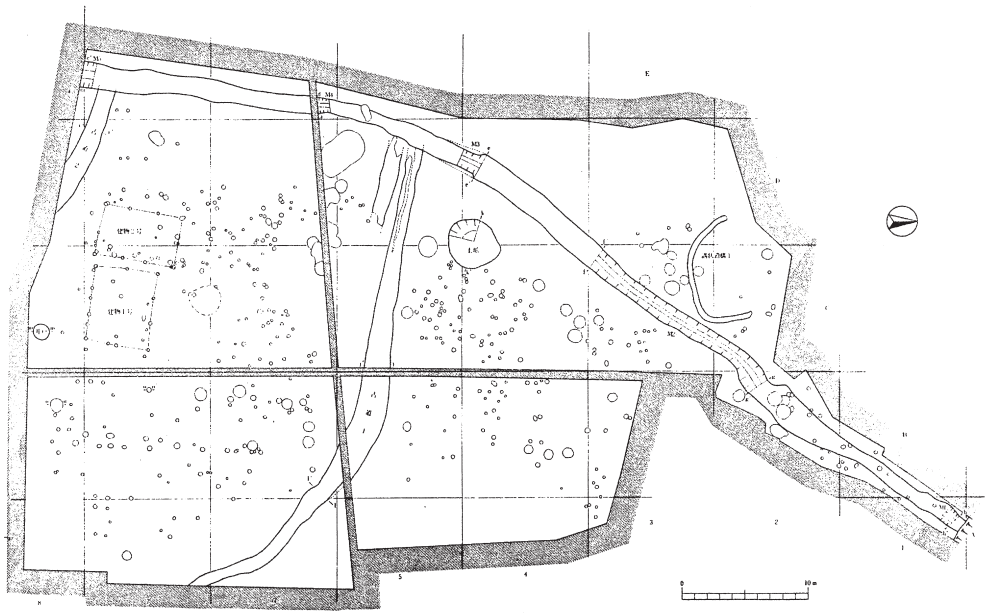
主体となる縄文土器は，肥厚口縁帯をつくり，そこを文様態とする土器で，いわゆる市来式土器の範疇に含まれるタイプである。文様の組み合わせは９通りに分かれるが，比較的単純な文様構成といえる。その主文様は，沈線文・凹線文・貝殻腹縁刺突文であり，それらを単体で施文するものが多く，組み合わせても比較的単純な構成で施文している。典型的な市来式土器にみられる凹線文や貝殻復縁刺突文を華麗に施文するタイプはみられない。

次に多いのが磨消縄文系土器で，外来系の土器型式である。本遺跡出土の磨消縄文系土器は，これまでの編年にあてはめると，小池原式土器・鐘崎式土器・北久根山式土器・西平式土器に比定される。

また，市来式土器の後に位置づけられる丸尾式土器は，末吉町丸尾遺跡で発見されて以来，最近出土例が増加しているものである。口縁部を逆「く」字に屈曲させて波状口縁を呈するもので，非常に特徴的な器形である。南九州本土の市来式土器分布圏に散見され，一型式をなすことが考えられる。屈曲稜部の上下に貝殻腹縁刺突文を施すタイプで，形態上においては若干市来式土器とは離れるが，これまでのところ市来式系統に含められているものである。



第２図　出土土器（１～４市来式系土器，５～７磨研縄文系土器）



第３図　中世の遺構配置図

草野式土器も１点出土している。

台付皿形土器は，中期末から後期に頻繁にみられるもので，本遺跡では市来式土器に包括されることが考えられる。土製加工品は，土器片を意図的に加工したもので通称メンコと呼ばれているものである。土器片の利用は，口縁部・胴部・底部のいずれの部位でもみられる。

縄文時代の石器は，石鏃・剥片・石核・錘状礫器・磨製石斧・敲打器・石皿などがある。総数は867点と多いが，定形石器及び使用された剝片は意外に少ない。同じ町内に所在する松美堂遺跡は年ノ宮遺跡より一時期前の縄文中期後半～後期初頭を主体とする遺跡である。年ノ宮遺跡の石器組成と石材の選択は，松美堂遺跡に類似する点が多い。

古墳時代は，拡張区の溝内などから成川式土器の破片が出土している。甕・壺・高坏などの器種がみられるが，いずれも細片であり型式等の判別は困難なものが多い。甕形土器は突帯部分から外反する口縁部をもつ土器であり，突帯の刻目はヘラによるものが主体である。壺形土器の突帯に注目すると，幅広突帯の中央に沈線を巡らすものであり，２本の突帯を意識している様子が窺える。型式学的には，複数の突帯から幅広突帯への過渡期であると思われる。以上のような特徴から，古墳時代中頃に位置づけられる。

歴史時代の遺構は，多種に及ぶ。規模の大きな溝状遺構を挟んで東側に井戸跡や土坑，掘立柱建物跡を含む多数の柱穴などがある。出土遺物から平安時代～中世の時期に構築されたことが想定される。溝状遺構を追跡したところ，200ｍを越える長さがみられることと，断面が半円形になることから，道跡の可能性もある。溝状遺構内から出土した遺物には，内黒土師器・須恵器を主体とする９世紀～10世紀にかけてのものと，磁器類・常滑焼きを主体とする13世紀～14世紀のものがある。出土状況は，両者とも混在した状態であった。地点を異にして，縄文時代・古墳時代の遺物が溝内から多く出土したことを考え合わすと，13世紀～14世紀の時期まで道として使われていたものの，その後廃絶されて不要になった道具類を廃棄したり，それ以前の遺物包含層を削って埋めたりしたと考えられる。

特徴

縄文時代後期中頃に内陸部であっても，北部九州系の磨消縄文系土器が間断なく流入していることが分かった。また，当地における鎌倉時代の大規模な溝状遺構（道跡か）を伴う集落の様相が明らかとなった。

資料の所在

出土遺物は，菱刈町教育委員会に保管されている。

参考文献

菱刈町教育委員会1991「寺山遺跡・年ノ宮遺跡」『菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書』６

（東　和幸）